

「よりよい学級づくりのために4月にできること
ステップアップするための土台づくりを意識して」

京都 山田 周司

はじめに 新しい年の始まりは

ちょうど一年前の四月、新しい学級は、何と二十年ぶりの二年生でした。その前の年まで二年連続で、最高学年の六年生を持っていたため、子ども達のイメージは、「六年生の先生」。何もしなければ、恐いイメージだけが先行するスタートとなります。何とか、「低学年の先生」になる必要があります。新しい学級の子ども達に、「優しくても話せそうな楽しい先生」というイメージを持たせることが、私が取り組んだ四月はじめのミッションでした。

とにかくはじめは、「褒めること」を最優先に進めました。と同時に、「叱るとき」はどんな時なのかを、子ども達の前で公言しました。また、授業でのルールを、実際の授業の中で、二年生にも分かるように説明して教えていきました。そして、学力づくりの取組を始め、学習での努力で褒められ

る場面をたくさんつくりました。子ども達は、しつかりと騙されて(笑)、みんな楽しい新年度のスタートを切る事ができました。

子どものイメージはつくられたもの

実は、子どもと子どもの関係は、これまでのイメージがじゃましている場合があります。子ども同士の声かけをよく聞いてみると、同じことをやっけていても、特定の子だけが、みんなから厳しく言われたり、その子だけが注意されたりするシーンがあります。その子は、これまでずっと大人から叱られてきたのでしょうか。大人が叱ることによって、「この子は叱られて当然の子ども」というレッテルが付いてしまっているのです。そんな場面に遭遇したときは、すかさず、その子だけが言われるその状況がおかしいと教えます。問題になるのは、その子だからではなく、困った行動のことな

のです。そのことをやっている全ての人が叱られる必要があります。

実は、褒めることも同じような効果があります。教師が褒めることによって、問題のある子だと思っていた子にも、良さがあるのだと気付かせるきっかけになる場合があります。どちらにしても、私たち大人の評価が、周りの子ども達の評価をもつくっていることに私達自身が気付いて、声かけをすることが大切なのです。

「褒めること」で新しい関係を

ところで、「褒める」ということをするために、「できた」ときを見逃さない観察力が必要です。そのことは、偶然に起こることもあります。もちろん、努力した結果としてできたのであれば、それが一番素晴らしい場面なのですが…。

ところが、私達教師は、小さなことや多くの子ができていることは、「できて当然」という考えから、見逃してしまうことがあります。私の場合は、気付いていても、「うん、うん。」と心の中で喜んでいることがありました。結果として、表現されないこの場面は、「褒める」ことにはつながりません。

その子の新しい原動力になったり、周りの子どもたちの視野を広げたりすることに発展していかないのです。

四月当初は特に、子どもの様子に目を向け、小さなことでも褒めていきます。小さかろうが偶然であろうが、褒められることに嫌気をさす子どもはいませんから。

「叱る」基準を公言する

いくら褒めることが大切でも、子ども達を叱る場面がない訳ではありません。逆に何も考えないで叱っていると、いろいろな場面で叱ることになります。目についたことを叱ることによって、改善を図らせるといふ気持ちは、私たち大人に必ず出てきてしまうものだとも言えるでしょう。

だからこそ、四月の時点で「叱る基準」を約束してしまうのです。公言すれば、子どもとの約束を守るために、事細かなことを言わなくても済みます。私は、以下の三点に絞って子ども達と約束をします。

- 何度も同じことを注意されるととき
 - いじめをしたとき
 - 命に関わるものが起こるとき
- 「これ以外で先生が君たちを叱ることはあ

りません。でも、叱るときは全力で叱りません。叱られたら、怖いよ。」

たとえば、子ども達は逆に安心し、こちら側にとつては、しぼりになります。

学習規律の初歩を

学習規律の整った学級は、授業をしていて、私達だけでなく、子ども達にとつても大変過ごしやすい環境をつくり出します。ただし、学習規律は、四月段階で全てできてしまうものではありません。学習規律は、徐々にレベルアップしていくものなので、はじめから高いレベルをめざしても、闇雲に厳しくなるだけで、肝心な成果を確認し合うことにつながりません。四月は、初歩的な学習規律を、さかのぼって確認し、褒めることから始めていきましょう。

【四月当初の学習規律 指導例】

手のあげ方：指先まで伸ばして挙手する。

耳の横に手を付けて。挙手していることがはっきりと分かって助かる。

発言の仕方：当たったら返事をして立つ。

椅子を直さず、素早く発言に入る。発言が終わってから、

さつと座る。次々と発言が続いて、気持ちが良い。

離席のとき：どうしても離席する必要があるときは、そのことを、手を挙げて告げてから。誰もが立ち出すと、理由があつても授業が中断するから。

音読の仕方：句読点で息を吸って、気持ちの良い声を心がける。

実際の授業の中で、これらの初歩的な学習規律を確認しながら、授業中の当たり前をつくっていきます。ここでも、「できた」を「褒めて」、「いつでもできる」に変えていきます。ですから、授業の進度は、決して予定通りにいきません。授業時間のほとんどを学習規律の確認に使うのですから。それでも、ここでのお互いの確認事項が、先々の授業での姿や、その後、レベルアップをしていく土台になるのです。

おわりに 段階論のスタート

四月は気持ち切り換わるとき。そのときを利用して、一緒にステップアップしていくスタートを切りましょう。誰もが気持ちのいい学級をめざして。